

私たちは生きていて周りの人から笑われるという事が平気でしょうか。今日は私たちが笑われた時に起きる感情について見ていきたいとします。(Ⅱコリ5：14～19) 私たちは日々新しくなっているのでしょうか。それとも古いまま生きていますでしょうか。私たちはイエス様に出会う前と出会った後では全く違うはずで、出会う前は古いまま生きています。しかし出会った後は新しくなり続けることができるからです。ではどこが新しくなったのでしょうか。ここが大事なのです。これを見誤ると笑われた時に感じる『恥』というものに勝つことはできません。恥は感情のように見えますが、感情の働きではありません。パウロも聖書の中で伝えて、「私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行っているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。(ローマ7：19～20)」それは私たちが自分の感情の制御ができないからそのようになってしまうのです。神様は感情をも作られ非常に良いと言われました。感情は私たちを楽しませ、幸せを感じさせてくれるとても良いものです。しかし私たちが感情をコントロールできなくなると自分や周りを傷つけてしまうのです。私たちは人を指差すことが容易にできます。しかし自分を見つめなおすことは難しいのです。何と見つめなおすのかというと、神様が造った自分の姿と今行っている行為について見つめなおす必要があります。その差について私たちは悲しみを感じて生きています。悲しみは神様が与えた素晴らしい感情です。その悲しみを感じた時に悲観するのか悲嘆するのか大きな違いがあります。悲観は怒りや逃避に向かいます。悲嘆は呻き(うめき)に向かいます。この呻きが神と人とを結びつけるものです。私たちは怒られた時、悲しむのでしょうか。それとも逆ギレ、開き直り、言い訳が出てきてしまうのでしょうか。多くの場合、素直にその事を悲しみ、また自分が悪かったと認めることができなくなっています。悲しい時こそ神様の前に出て行きましょう。それができないと悲観となり、それは怒りか逃避に向ってしまいます。そして傷つける相手を排除しようしたり、それらを破壊しようしたりしてしまいます。それは羞恥心に結びついているものです。羞恥心は悲観をそのままにしているとなっていく。反対に悲嘆は神様に結びついていくので罪悪感となって良い実を結びます。この2つのうち1つは素晴らしいものとして神様は造られました。人が悪いことをした時に神様に戻る方法です。それが罪悪感です。もう1つの羞恥心は神様に戻ることを妨害するものです。それでは羞恥心とはどのようなものなのでしょうか。羞恥心というのは、恥ずかしいと感じる気持ちのことであり、恥を感じている気持ちのことなのです。羞恥心とは、自我や自尊心の延長にある概念とも言っています。聖書ではこれを原罪と表現しています。羞恥心は4つに分類されます。①自己の存在が取るに足らない物と感じ、自己を否定したいと思う「全体的自己非難」。②恥を感じる状況から逃げたい、もしくは恥を感じた記憶を消したいと思う「回避・隠蔽反応」。③自分が周囲から孤立したと感じる「孤立感」。④人に見られている、人に笑われていると思う「被笑感」となります。また羞恥心はしばしば罪悪感と比較される感情です。羞恥心を感じやすい人は、罪悪感を持ちやすい人より攻撃的で、反社会的であると研究結果もあります。羞恥心は、外部への帰属、他者への強い焦点、復讐といった感情や行動を発生させる屈辱感を伴い易いからです。聖書の中には羞恥心で生きていた人と罪悪感で生きていた人が出てきます。それがサウル王とダビデ王です。それは罪を犯した時に明白に分かれました。サウル王は罪を犯し、預言者サムエルに指摘された時、「民の前で面目を立ててくれ」と言って羞恥心から出てくる行動を預言者に伝えています。しかしダビデは預言者ナタンに罪を指摘された時、即座に神様の前に悔い改めをしました。サウルは人間の見た目には「かっこよい」人となろうとしました。羞恥心を持っている人は人間の見た目にはクールでかっこよいといわれる行動を取ります。反対にイエスキリストの十字架は「クール」とは程遠い状態でした。それが神様の方法でした。この羞恥心はいつ人に備わったのでしょうか。また原罪がいつ人に入ったのでしょうか。それはアダムとエバの時代に遡ることになります。彼らも神様の約束を守れず、善悪を知る木の実を食べてしまった後、神様はアダムに声をかけます。しかしアダムは神様から隠れます。アダムは裸であることを恥ずかしいと思ったからであると記しています。神様は誰が裸であることを教えたのか?と問われています。すなわち、恥ずかしいという思いは神様が与えたのではないことを明確に記しているのです。悪魔が羞恥心という悪の道を私たちの中に入れたのです。悪いことをした時に「ごめんさない」と悔い改めることをできなくなったのです。隠蔽をして私は悪くないと罪を認めることが出来なくなっていくのです。アダムは恥かしさの故に罪を認めることができず、責任転嫁してしまいました。ですから恥という概念は神様が与えたものではないことを理解しましょう。人を創造した時には恥という概念はありませんでした。ですから周りの人と比較をしません。それは争いがなく、憎しみもありませんでした。しかし恥が人に入った時から、比較する人生となりました。自分と周りの人。今と理想の自分との比較などいろいろと比較をします。ここで私たちが造った神様の理想の姿を見ることができれば、間違ってしまった時は恥と感ずることがなく、造った神様の元へ行き、修理してほしいと願う=悔い改めることができます。人から間違っているとされるとその間違いを持っている自分が否定されたように感じさせてしまうものが羞恥心です。これは聖書に書かれていて人を神の愛から引き離す悪魔が与えた最大の剣となっています。罪悪感というのは償いをしたら解消されていきます。私たちの行動が悪かったため、その行動をやめれば良いだけです。しかし羞恥心は悪魔がもたらすものです。はじめは悪魔だと分からず、そのまま行動していますが実は悪魔だったということが多いためです。悪魔は私たちに誘惑して周りの人に責任転嫁するように促していきます。恥とは耳と心で表現しています。これは耳もとて語りかけてくる言葉です。しかし神様は心に語ってきます。アダムとエバに食べたら死ぬと言われた部分は「心」です。寿命ではありません。心が死んでしまったので悪魔の語りかけてくる言葉によって生きることになっていったのです。イエスキリストの十字架はこの心に語りかけてくる神の声を直すためでした。日本は恥の文化と呼ばれています。人と比べて生きていくことになります。私たちは人からどう見られているのかを言われながら育ってきます。神様との新しい生き方はどのように証しになるのかという生き方です。羞恥心は心の衝動を起こさせます。人の感情を使って悪い行動に出させるのです。悪い行動とは逃避・破壊・自己否定などです。しかし私たちが感情によって行動するのはなく、感情をコントロールしていくことができるのです。まとめてみますと羞恥心とは現実と自己理想とのギャップから生まれてきます。この自己理想とは育った環境(道徳的、社会的、人格的、霊的)によって形成されるものとなり、神様が造ったものではありません。私たちに関わった人、親、家庭、友達などの人間関係によってなのです。ですから神様にあった自分の本当の姿に気がつけば私たちは変わっていくことができます。神様のために用いられる人は人間的に能力のある人ではないと書いてあるからです。(Ⅰコリ1：28)「また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものがない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。」羞恥心を捨てる道、すなわち原罪を捨てる道が神様と歩む道なのです。①羞恥心を知り、羞恥心を理解していきましょう。私たちは羞恥心がどこからきて、どのようなことを生み出していくのかを理解してきたと思います。素直にごめんないと言い、新しい歩みをしていきましょう。②人間的標準を捨てましょう。人間的標準は何によって形成されるのか理解できたと思います。それは今までの人間関係から得たものであり、経験したものです。しかしそれが羞恥心を作り出しているものであることも理解しています。ですから私たちはこの人間的標準すなわち、知らない内に作られている「自分ルール」を捨てないと周りの人や自分を見る時に歪んで見てしまうのです。ピカソは奇抜な絵が有名ですが、誰よりも基本を勉強し、技術もあつたのです。しかしそれに捕らわれない方法で描きました。見た人も「それはそれで良い」と人間的標準を捨てて受け入れたのです。同じように私たちが神様にあってそれぞれが個性的に作られているのです。その姿から離れてしまったのであれば、悔い改め元に戻らなければいけません。裁くことは捨て去りましょう。③新しい自分で生きましょう。(Ⅱコリ5：17～18) 私たちは古い生き方を捨て、神様と共に新しく生きていきましょう。古い生き方とは何でしょうか。それは原罪から生まれた羞恥心によって生きることです。これは悪魔が私たちに植えつけたものでした。しかし私たちはそこから抜け出し、新しい歩みができるようにしてくださいました。それがイエスキリストの十字架による恵みです。この恵みに感謝して羞恥心を捨てて歩いていきましょう。(要約者：平澤 一浩)